

地域発 防災ラジオドラマE藤沢

六会天神町 地震災害編 シナリオ 第2話

地震発生から三日後 二〇一〇年一月二三日

自主防災組織の災害対策本部 天神町会館

時間 午前十時頃

気温 九度 晴

課題 災害時要援護者の地域支援

状況設定

被災から三日後、地域住民も復旧に向けて動き出しました。被災程度が比較的大きかった住民の中に、家族の介護を必要としている人がいます。平時に利用しているデイケア事業施設が被災により一時的にサービスが受けられなくなりました。家族も震災という非常事態とはいえ、長期間仕事を休むわけには行かない状況です。何とか地域で支援できないか、町内会の役員が集まって相談をしています。

前説（ナレーション 毎回放送）

独立行政法人防災科学研究所では、災害時に地域に起きることを住民主体で考えるための方法として、地域の災害シナリオの作成を提案しています。災害シナリオは、行政が作成した各種災害の被害想定やハザードマップを下敷きにして、地域の「より細かい事情」を勘案して、災害時に実際に起きることを時間に沿って具体的に整理して記述したものを指しています。災害シナリオは、地域の関係者が具体的に自分たちの直面する事態を考える仕組みづくりのきっかけとなるものです。シナリオにすることで、事態の展開していくイメージが

掴みやすくなり、必要な対応もわかりやすくなります。

藤沢市では、これまで藤沢市立鵜沼中学校を避難所とする地区防災連絡協議会の地震シナリオ、鵜沼海岸五丁目自治会自主防災会の水害シナリオを作成いたしました。今回は六会天神町での地震シナリオに基づくドラマを放送いたします。この地域は藤沢市のやや北部に位置する閑静な住宅地ですが、昼間は多くの方々が地区外に通勤通学されているため、高齢者の昼間独居が防災上の課題の一つになっています。

地域防災ラジオドラマ・イン・藤沢。六会天神町地震災害編。このドラマは地域住民の方々がワークショップで議論した内容に基づくフィクションです。

【ストーリー】

登場人物

石川会長 町内会と自主防災会の会長で避難所の総括責任者

岡田副会長 自主防災会の副会長

中村（女性） 民生委員

大山（女性） 自主防災会救出救護班 天神町会館勤務

河内（女性） 自主防災会救出救護班 天神町会館勤務

鍛冶山（女性） 町内会の会計

【ナレーション】

震災から三日たって、徐々に被害の全体像もわかってきました。天神町では被害がそれほど無かったものの、藤沢中心部や湘南地方では大きな被害のところもあり、各地で災害対応の活動が始まっています。

このような状況の中で天神町でも、介護者を抱えた住民の方に、対処の難しい事例が出てきました。平時は利用できていた介護施設が、震災のため利用できなくなり、どうしたらいいだろうという相談が自治会長のところを持ちかけられます。急遽自治会の役員と民生委員が天神町会館に集まって相談することになりました。

大山 「少しは片付いたかな」

河内 「ほかの集会所はたいしたことないけど、給湯室は酷かったわね」

大山 「食器棚が倒れちゃったからね、湯飲茶碗は買い足さなくちゃ、それとポットも中が割れているのがいくつかあるし」

河内 「会館の被害がたいしたことなくてよかったわよ」

大山 「工務店さんが応急処置してくれたからね、割れた窓ガラスにはビニールシート、崩れた石段には仮設階段、しばらくはこのままね」

河内 「しようがないわよ、でもここが使えるのは助かるわ、必要なものはみんな揃っているんだから」

大山 「河内さん、今日の会合には何人くらい集まるの」

河内 「会長さんは、はっきり言わなかったけれど、役員はせいぜい五、六人じゃない、そうだと中村さんもくるって」

大山 「中村さんて民生委員の？」

河内 「そうよ」

大山 「何の話なんだろう？」

河内 「分かんない。昨日から電気と水道が使えるようになって助かるよね」

大山 「昨夜は久しぶりにお風呂に入ってさっぱりした。それに夜、明かりがつくとホッとするよね」

河内 「懐中電気やローソクじゃ気持ち落ち込んじゃう」

大山 「でも、皆が一部屋に寄り集まって、家族の絆が深まったって感じ」

河内 「うちもそうだった、こういう災害に遭うと子供たちも家のことを率先して手伝ってくれて、すごく協力的なのよね」

大山 「地震はいやだけど、この思いやりは続いてほしいわよね」

河内 「のどもと過ぎれば何とかで、すぐ自分の部屋でテレビゲームよ」

大山 「ウーン、それが現実か」

石川会長と岡田福会長がやってくる。ガラガラと引き戸の開く音

石川 「ごくろうさん、すっかり片付いたね、自分のうちの方はどうなの」

河内 「まだまだですよ。窓の枠が少しゆがんじゃって。後はたいしたことは無いんだけど、大工さんが来てくれなくて。ここの集会室はざっと掃除しときました」

岡田 「ありがとう、机といすは僕らが並べるからいいよ」

大山 「役員さんは何人くらい見えますか？」

石川 「会計の鍛冶山さんと民生委員の中村さんだ」

大山 「四人だけですか」

石川 「いや、大山さんと河内さんにも参加してもらいたいんだ」

河内 「私たちですか？」

大山 「何の話なんですか？」

石川 「皆集まったところで話すよ。ああ、来たようだ」

鍛冶山 「遅くなりました」

中村 「二時からでしたよね」

石川 「ええ、私達も今来たところです」

岡田 「さあ、席についてください」

石川 「二人もこっちに来てくれないか」

大山 「はい」

河内 「今お茶を持って行きます」

椅子を引いて席に座る音、湯飲み茶碗を配る音

中村 「会長さんも大変でしょう、ご自分の家のほうは大丈夫なんですか」

石川 「私が居なくても、ほかの者がやってくれますから。中村さんだって老人会館に詰めつきりだったでしょう」

中村 「私のところはほとんど被害がありませんでした、防災対策しといたんですよ、家具を止めるとか、ガラスにフィルムを張るとかして」

岡田 「家もやってみました。かなり効果ありますよね」

鍛冶山 「自主防災会からよくお知らせが回ってきましたものね、あれで対策をとっている人は大勢いると思いますよ」

石川 「ほかと比べると天神町は、引地川沿いの地盤が緩くてね。昔造成で埋め立てた谷戸の所が崩れた以外、これといった大きな被害は起きていないようだ」

中村 「で、今日私が呼ばれたのは何の話なんですか」

石川 「実は、町内で、家族の中に介護を必要としている人がいる方から相談がありました、ほかにも何軒か同じような家族がいるようなので、中村さんのご意見を聞いて、皆さんのお知恵を拝借しようと思ったんです」

中村 「具体的にはどのようなことなんですか」

石川 「今まで利用していたデイケア施設が被災してサービスが受けられなくなっただろうだ、他にも、ヘルパーさんがこれないので困っているお年寄りや寝たきりで介護の手伝いが必要な家庭がある。地域で何か支援ができないかということなんだ」

中村 「独居老人については、私も見回りして声をかけたりしているんですが、状況によっては老人会館のほうで一時引き取ろうかという話も出ていますが、今はこの状態で職員も足りないし無理なんですよ」

岡田 「家族はいるんでしょ、ショートステイやデイケアが利用できるまで、しばらくは家族が面倒見るよりしようがないでしょう」

石川 「共働きなんだよ、このご時勢だから長期間仕事を休むと解雇されちゃうそうだし」

鍛冶山 「それを地域で面倒看ろって言うのは難しいわよ」

大山 「市の方で応急救護施設があるんじゃないの、そこに頼んだら」

石川 「そこは市が指定している特別養護老人ホームなどの福祉避難所や小学校や市民センターの避難施設の中を仕切って作った臨時の救護施設なので、そこに避難している家族でなくちゃいけないんだよ、自宅で避難している人がデイケアがだめだからって言う理由で避難所に収容するのは無理だよ」

河内 「災害時には、他の市でも受け入れてくれるって聞いたことがあるわ」

中村 「それは集団疎開みたいなものなのよ、三宅島の噴火のとき島民が全員で東京都に避難したでしょ、他のところに親類があればそこに移るとか」

鍛冶山 「大災害になっちゃうと、全体が落ち着くまでは個人の対応になっちゃうんだ」

石川 「そう、自分のことは自分がやる、それが当たり前なんだが、個人で対応することには限界がある。だから、一軒でだめなら隣組でそれがだめなら町内でって思っているんだ。理想論かもしれないけど」

岡田 「行政が出来ないなら地域で、地域がだめなら町内会で出来ることがないかって言うことですよ」

石川 「まあ、そういうことだな」

中村 「会長の気持ちは分かりました。では具体的に例を挙げて、私たちに何が出来て何が問題か列挙して見ましょう」

鍛冶山 「それがいいわ、中村さんはこの町内の要援護者のことを知っているんですもの」

中村 「私が把握している中でってことよ、名前は言わないわ」

石川 「それでいいですよ。個人情報時代ですからね」

中村、かばんを開けて資料を出し、ページをめくる音

中村 「まず一人暮らしのお年寄り、体力的に弱っているけど身の回りのことは自分で出来る人ね。結構いるわよ」

大山 「買い物に行くとき、必要なものを聞いて買ってきてやるとか」

河内 「時々様子を見に行きながら、話し相手になってあげるってのはどう？」

中村 「では、認知症の人」

大山 「あたし徘徊しているおじいさん知ってる。家族が探しているから見かけた時は、何処そこに居たよって教えてあげるの」

河内 「私知っているのは、食べたことをすぐ忘れちゃうおばあさん。「嫁が何にも食べさせてくれない」って、近所に触れ回っているの、お嫁さん泣いていたわ」

鍛冶山 「どっちも悲惨だけど、私たちに何が出来る」

大山 「知らない人が声をかけると怒るのよ、だから家の人に連絡してあげるくらいかな」

河内 「おばあさんも同じ、「そんなこと無いでしょ」なんていったらもう大変。

だからお嫁さんに、「分かってるわよ」って声かけるくらいかな」

岡田 「プライベートなことだからな、あんまり近所に知られたくないと思っているだろうし、デリケートな問題だね認知症は・・・」

中村 「誰にでもその可能性はあるのよ」

中村、咳払いをして、ページをめくる音

中村 「では、次は知的障害者や重度の身体障害のある人ね」

鍛冶山 「これも難しいわね、車椅子の乗り降りやトイレの世話もあるでしょ」
大山 「これは専門家に頼むしかないでしょう」

河内 「専門家ってヘルパーや看護師さんでこと、何処から来てくれるの」

大山 「ボランティアセンターよ、資格のある人を派遣してもらうの」

岡田 「普段付き合いの無い人やボランティアでも、知らない人は受け入れにくいかも」

鍛冶山 「障害者の人は、見慣れない人に介護されると怖がる人がいるかもしれないわね」

石川 「信頼関係が一番大事だろうな、身体が思うように動かせないんだからイライラするだろうし不安もあるだろうから、ストレスがたまるしね」

岡田 「それより、介護に伴う事故が怖い、責任を問われるような事になったら問題だ」

石川 「岡田さんの言うこともつともだね。素人には責任が重過ぎるかなあ。

資格のあるボランティアだとしても同じ人がずっと面倒を看てくれるわけじゃない、ボランティア活動は二・三日、長くて一週間で交代だ、障害者も家族も気疲れしてしまうだろう」

大山 「でも、何かボランティアをうまく活用する方法は無いかしら」

河内 「支援をする人を一箇所に集めてしまうて言うのはどうかしら」

鍛冶山 「この会館だったら和室があるし台所もあるから」

岡田 「だめだよ、表の階段は仮設だし、和室は二階だぞ」

鍛冶山 「そうか・・・。あつ、天神小学校の一階は障害者の人でも入れるようになっっているわ」

石川 「小学校は災害避難施設になっているんだよ」

鍛冶山 「だめか・・・一箇所に集まればボランティアの人たちの引継ぎがうまくいくと思っただけだな」

石川 「今すぐには間に合わないけど、地域でボランティアコーディネーターを育成しようとしているんだ、現在六会だけでまだ五十数名しかいないんだけど」

中村 「で、この問題は？」

石川 「障害者の問題は簡単じゃないね。でも地域で出来ることを考えていう。何とか良い解決策が見つかるさ」

中村 「では、寝たきりのお年寄り」

鍛冶山 「特養老人ホームにお願いしたら。ほら、小学校の近くにあるじゃないグリーンライフ湘南」

岡田 「ああ、あそこは協力してくれるだろう、防災訓練にも参加してくれるし、理事長も知り合いだからね」

河内 「これは、普通のときでも福祉事務所の仕事でしょ。寝たきりで一人暮らしなんて誰が普段面倒看てるの？あれ、これって会長さんに相談してきた人のこと」

中村 「私は知りませんよ、でも、もしその人なら受け入れ期間を決めて特養のグリーンライフ湘南に相談するのがいいと思う、そのときは町内会長が口ぞえしてね」

石川 「それが結論ですか。はい分かりました、早速そうしてみますよ」
参加者一同 「笑う」

石川 「今日は忙しい中お集まりいただき、貴重な意見をありがとうございます。また、まだまだ何かと問題が起きるだろうと思います。その時はまた相談しますのでよろしく頼みます」

皆で後片付けをする、机やイスをたたむ音、茶碗を片付ける音等々
片付けの合間にそれぞれ近況や災害当時の雑談を交わす
明るい感じの音楽が流れてくる

このドラマは住民はじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしています。社会的なシミュレーション（模擬演習）として、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

● 六会天神町には、平時の連絡網として存在する自治会の班組織があります。またこれとは別に住民有志による自主防災組織が結成され、活動を行っています。また六会地区では各地区の防災組織が連帯して活動している六会防災リーダー会が結成されていることが地域の大きな特徴となっています。六会防災リーダー会は各町内の自主防災組織からメンバーが選抜されて六会地区全体の防災訓練や防災講習などの取り組みを行っています。実際の災害時には地域連携にも何らかのかかわりが出てくると思われる。六会防災リーダー連絡会の活動については描かれておりません。

- 第2話では高齢者を一時的に収容する施設として関係者が老人会館に詰めるというエピソードが語られますが、老人会館は実在の施設ではありません。また天神小学校に隣接するグリーンライフ湘南という特別養護老人ホームが登場します。こちらは実際に存在する施設で、ドラマの中で語られている通り六会地区の防災訓練にも参加され、人的交流が図られています。地域的には六会地区ではなく南側の善行地区に所属します。災害時に地域の福祉施設と連携を図るために何をしておくべきかは、今後重要な課題として地域で検討されることになっています。

ストーリー2終わり